

第 6 回目 (1993 年 11 月 13 日放送)

【いろはがるた】

「かったいのかさ恨み」: A leper patient wishes that his disease were suffer less.

【話の内容】

この何十年、日本とアメリカの間では米をめぐる問題があった。日本にアメリカの米を購入することが争点であった。1914 年の新聞によると、中国人とハワイアン¹のハパ¹であるアーネスト・アキナがコハラのニウリイで 300 エーカー(1 エーカー=1200 坪)の米作をしていた。中国から 100 人の労働者を連れてきたアキナは、大規模な米作を行い、アメリカ本土に米を輸出した。当時アメリカは第一次世界大戦の真っただ中で、本土から米が流通することもなかったため米作で財をなした。アーネストはのちに議員になったが、弟のアーサー・アキナはコハラ警察署長になったのちにハワイ下院議会で議長となった。

大正 7 年という、日本では大飢饉があった。当時、東京で勉学に励んでいた大久保は、ベトナムの方から来た長い米を食べていたが、まったく味がしなかったという。日本の米はそれより短く、丸っこく、甘みがあってやはりいい。

熊本出身の彌永寅吉は、明治 39 年 3 月に日本からおかぼ(陸稻)の米を持ち込み、同年 4 月 18 日に米を 3 合、もち米 2 合をコナのケアラケクアのコーヒー農園で栽培した。ハワイ初の日本からの陸稻は、その後、米が 65 貫、もち米が 38 貫できたという。ヒロで米を作らなくなったのは、サトウキビに押されたためだが、今は水田の跡もない。

自分は米どころ新潟の出身だが、水田は休ませると良いお米が作れるという訳でもない。日本の南の方では、1 年のうちに 2 回米が作れるが、北の方では 1 年に 1 回しか米がとれない。東北の農家はいい米ができてもお金が稼げるわけではない。明治初期に 3300 万に留まった日本人の人口は、大正 5 年には、樺太、台湾、朝鮮なども併せて 6000 万にまで増加した。戦争が終わり、樺太、台湾、朝鮮などがなくなっても、日本は 1 億 2000 万という人口をかかえている。昔は個々の水田は小さく、手作業だったが、今は大型化が進み機械で米作が行われる。確かに昔の農村風景も良いが、米がとれなくなり、輸入に頼るのも問題である。また、やはり機械(自動車)を作る方がお金もうけにはなる。そのあたり、米などの問題について、アメリカと日本でごたごたしているが、うまくしてくれよ、と細川護熙総理には期待を抱いている。

¹Hapa. ハワイ語で半分の意から、ハワイアンとのハーフを意味する。現代ではハワイアンとのハーフに限らず、日本人と白人のハーフも意味する言葉としてハワイやカリフォルニアなどでも使われている。

【曲】

「旅愁」(歌: 武田テル子 演奏: 松竹オーケストラ)

【サブジェクトタグ】

稲作 ハワイ島 日米関係 有力者